

利井鮮妙　述

十倍素早く読める行信乙丑篇

名著復刻堂

夫れ行信の法は、宗の淵源にして片時も緩にすべからず。故に学者、力を竭し、蘭菊の争ひをなす。然れども動もすれば、惑を生じ異計をなす。

爰に吾が空華轍の如きは、辱かたじけなくも、先師深く此の間に心骨を碎き、行信の玄底を尽くせり。然れども中比、先師を輕蔑し私の臆説に誇り、終に他轍に混じて、異解を主張するの徒もあらん。悲歎すべきに堪えたり。

故に聊か見聞の疑雲、管見に及ばんほどにまかせて此れを通消し、以て一家建立の行信綱要、百万端が一頭を乙丑窮陰記念日、涼曉閣の北窓に贅語す。其の漏れる所の者は他日の補を俟つのみ。

名号大行章

名号大行章

夫れ仏果成の尊号、直に大行と名くるや、吾が空華の先師の常に弁立し給う処にして、諸祖の釈判、爰に究するに似たり。今正に決著せんと欲するに、略して三門を作る。

一には所行の依拠を定め。二には名義を弁じ。三には義相を示す。

一、所行依拠

一に所行の依拠とは、名号を直に行と呼ぶもの、善導の所謂る「即是其行」、『略文』類所明の利他円満の大行、『行文類』の大行、四法大意の南無阿弥陀仏の妙行、六要鈔所明の所行。

異解者、此れ等を果号當面の釈とは許さざれども、文を句面の如く伺うときは、阿弥陀仏に南無する其の阿弥陀仏とは、當体全は其行なるが故に、何ぞ称名行と会釈することを得ん。若し爾らずんば、何ぞ別時意を会することを得んや。又、因行果徳対も此れなり。況んや行文類、略典、

共に所信所聞の法を指して、直ちに得名して大行と呼ぶをや。

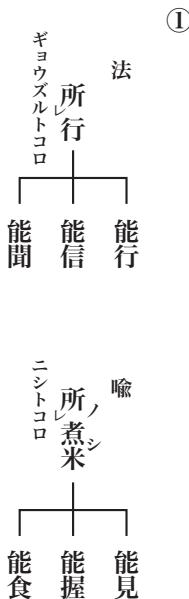
六要鈔所行

六要二本（千丁左）、「十七・十八更に相離せず、行信・能所・機法一也（乃至）十七・十八両願俱に存し、所・行・能・信共に以て周備す。」文

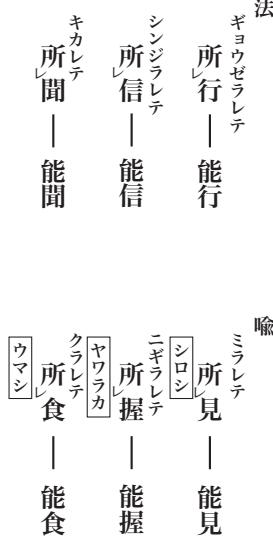
又一（十三左）、「行は所行の法、信は是能信なり。故に玄義に云く。南無と言は、即是皈命、亦是発願廻向の義なり。阿弥陀仏と言は、即是其の行なり。斯の義を以ての故に、必往生を得。已上。信行離れず、機法是れ一なり。」文

又二末（二十四丁）、「正とは傍に対し邪に対し雜に対す、信とは疑に対す、今は是れ行に対す。所・行・法に就て能信の名を挙ぐ。」文

此れ等の文によるときは、能聞所聞、所信能信、能讚所讚等の一双の名目にあらず。今、幼学解し易からしめん為に図して云く。



(2)



此の二の図の中、今の所取は第一にあり。第二は簡非の為に挙ぐのみ。

問云。六要所明の所行とは、恐らくは第二の図の如くなるべし。爾るを「所行・能信」とするは、互顯にして、能信より所信を影顯し、所行より能行を影顯して、以て機法共に行信の名、周備するなどを示し給ふならん。故に同一本（十二丁右）に云く。

「今当卷に引くことは口称を本と為す、第十七の意なり」文

明らかに知る、行は能より所に及んで以て得名し、行の名、偏に称名に局るべし。
又、『能信に對して所行』とは、能行の信に對して、行する所の法を挙ると云うことなるべし。
六要处々に、念佛の信心と談じ給ふをや。

答。六要一部を諦観するに、行は所行にして、信にも対し、又能行にも対す。能行より所行に及ぼすの相は見ず。所行より能行に及ぶ相にして、法体當面、行の得名なるや明らかなり。

仏所行

何となれば、六要三末（初丁左）に、
「仏の所行の外に衆生の行無し、如來の廻向成就の義也。」

又、三本（十二丁）至誠心の釈、同三末（二十左）分陀利華の釈、及び前に出す所の諸文、合
わせみるに、すべて所行より能に及ぶの相た。明らかに知る、行とは所行、即ち仏の所修にして、
一（十七丁）等に所謂る、「衆生所修の行」、「仏所行」とはこの謂ひなり。

二、弁名義

進趣

二、釈名義は、蕪園大行義に五義を出す、迂遠也。

今之意、若し通途の名目を借らば、進趣の義と云うべし。強いて此の名目を嫌ふ徒には、立目
せずしても可なり。只、從因向果の行業と云ふべし。

三、示義相

三に、大行の相状とは、通途で云へば、思業を以て行の体とす。爾るに今家に判ずる大行とは、
仏体即行、仏名是行にして、仏に約して云へば、たど是れ果徳。衆生に約して云へば、全く我等
が因行、因行果徳不二なるものを、此を弘願の妙行と云ふなり。

問云。果号を何ぞ行と名くるや。

答云。果に行なしとは云ふべからず。仏の十号、已に妙行足善逝と云。

又、善導は、「自覺覺他覺行窮満」文又、仏は目闇比丘の為に針を貫く。仏は止息の情なくして、
功德を行ず。通途すら此の如し、況や別途不共の妙行、果上に此を談ずるに何の妨碍かこれあらん。

問云。通途の上でも、行と名けてあれども、果に行相あることみがたし。況んや通途に行とは、

仏三業造作

「諸仏といへども自利の為には造作もなかるべし。況んや進趣をや。故に、義林の為には造作も進趣もなし。利他の為には之あるべし。故に仏の三業を三輪と云ふ。

輪とは摧転と運転との義ありて、衆生をして煩惱を摧破し能く涅槃に運転せしむ。これ造作進趣の義なり。」

(末燈鈔行信戊戌記)

自利に約するに似たり。今、弥陀名号の果上に於て。其の行相あらば、具さに弁すべし。

答云。たとひ諸仏と云へども、自利の為には造作もなかるべし。況んや進趣をや。故に、義林章には、仏の三藏を三輪と名け、輪は運転・摧転の義あり。衆生煩惱を摧破し、菩提に運転せしめ給ふが故に輪と名くると、利他に約す。

今、弥陀仏の誓約、元と衆生の因とならんと、その本願成就の名号なるときは、果号、其の仏衆生の為の行となる。

問云。名号は衆生の為にも果にして、因行にはあらざるべし。成就するの果号、衆生よりみるとも、仏より談するとも、共に以て一の果号なり。何ぞ行と名けんや。

答云。永劫行、衆生の行を成せんが為なる故、成じた名号、亦衆生の為には行なり。

たとへば、今年の種子萌出て、終に花咲き実を結ぶ。此を今年の中で談すれば、種子萌芽は因、結実は果。今年の因果共に来年の種子を成するにあるが如し。故に果号を衆生より因と名くる。

果号行相

問云。成程、果号を因とも名くる事は、一往は爾るべし。但し行相なくんば、有名無実となる。其の名号に於て因行の相状云何。

答。仏の三業の造作、即ち衆生の因業を造作するなり。喻へば陶家輪の如し、輪の造作は即ち陶の造作。輪に進趣なし。陶に進趣あり。陶の進趣、輪の造作の外なし。唯是一。爾れば進趣の相、輪の造作の外に求むべからず。今、他力の即行も此

造作進趣

に比して解すべし。

問云。仏の果号、究竟円満の法。何ぞ未究竟の因相ありと云ふや。

因果不二の果

答。仏は因果不二の果を成す。故に衆生は其の因の方を持つ。喻へば小判金で作りた花を、小児に持たせるが如し。小判で持たせては玩弄の具にならず。花と造るが故に小児の玩具となる。其の相の方で持たせるが如し。果で作った因をもたせる。宜しく思押せよ。

問云。仏の三業の造作。云何が衆生より行と名くるや。

答。破闇満願して、よく転迷開悟の力用をなす。何ぞ行相なしと云ふや。明らかに知んぬ、名号大行なることを、知るべし。

問云。爾らば破闇満願は信の一念なるべし。未だ信とならざるの名号の当面に破闇なし。爾れば法体の名号当面に行相はなかるべし。云何。

答。未だ機中に落在せざる名号はなし。十七願の大行は、いつも十方世界へ流布してある。其の流布とは十八願の三信十念なり。此の十八にみられてる法体なれば、機中落在なること、知るべし。

爾らば問云。成程、十八から眺められて居れども未だ衆生に掌握されてはなひ。仍て所聞所信の法体と云。何ぞ落在せざる大行なしと云ふや。

答。其の十八からながめられて居るとは、どの位のものなりや。夫れは十八の機にあらで、十九二十の機なるべし。若し爾らば今の所論にあらず。聞其名号と聞とどけた位ならば、諸仏の讚嘆、一声々々十八願に所得せられて、破闇満願する。

正覚の一念より今に爾り。仏の果号成するとき、諸仏これを讚嘆す。讚する處、則ち衆生の心中に入る。爾れば即是其行は、虚空に行相をなして居るに非ず。常に衆生の心中に融入して往因と働く。ここを即是其行と云。

爾れば行巻・信巻、一念同時にして、説必の次第なるのみ。爾れば信心の破闇、即ち名号の破満、**同時一用**。ただ、機から呼ぶと、法から称するとの異にして、行信の名あるのみ。

化風同別事

化風同別の事

問云。終南・吉水、称名往生と談じ給ふ。吾祖、殊に信心正因と判じ給ふ。師資相違するに似たり、云何。

筑前義

信因行縁

答。一義云。師資相違せず。信に行を離さず、行に信を離さず。信行相扶して、以て往因を成す。爾れども二つともに正因の力用ありと云にあらず。信因行縁。此義を頗るものは行巻光号因縁釈なり。

終吉は行廃立に約して因を縁に収めて正因とす。高祖、之を通じて信心正因なりと結し給ふ。

評云

評して云く。爾らば行縁の称名は信同時なりや。初起一念、信称並起せば、信は時節の中の極促、称は時節必ず次第を歴ん。又其義の如くなれば、称名正因実理を成す。信行共に來果を牽引するの力用あれば、共に因なり。何ぞ因縁を分んや。

豊前義

三正定業義

又或が云く。凡そ真因の名を施すもの三あり。

一には名号正因、是は正因具用に付て施す。二には信心正因、是は正作力用に付て施す。三には称名正因、是は持用相続に付て施す。此の三互に不離。

或は名号に付て勧め、或は信心に付て勧め、或は称名に付て談ず。終吉は持用に付て正因を語り給ふ。高祖は作用に約して談じ給ふ。云々。

評云

具用

評して云く。第一に具用と云ふことは許し難し。何となれば、名号の当面に付くときは、いかなる法義を顯すや。既に衆生の因法成就の法なれば、具とは許すべからず。具とは当面に法義を顯して居るものに、其の余の徳を持て居るを具と云。名号既に、当面衆生の因体ならば、具とは云ふべからず。（是二）

又所弁の如くなれば、名号当体、未だ機中に落在せぬ位で談ずる心なれど、前に屢々弁ずる如く、十七の名号は常に十八の手に入て居るなれば、正作力用せぬときなし。上に準知せよ。（是二）

二に正作力用とは、名号に簡んで信心を張り立つ故に、信も大信ならず。

三に称名持用。是れ又爾らず。何者、初帰の信心、一生涯の称名迄も該摂して居れば、其の信

作用

持用

が延びて称と出れば、出れども出れども正作用すべし。

喻へば日輪の破闇するは曉天にあれど、一日相続して時々に作用する故に、四天下闇冥ならざるが如し。

爾らば、何ぞ行信の間に、作用・持用の名目を用んや。況んや称名破満も会通して通ることになる。

石泉義

願力正因

評云

信行等分

評して云く。若し所解の如くならば、信心正因とは、信心となりた處で、業成すると云ふこと

を顕したこととするや。

信心となりた處で往生をなすと云はば、称名正因とは、称名となりた處で、初めに正因となるや。爾ずんば、称名とならぬ先より正因なる故に、称は有無妨げ無しと云はば、信心正因も有無妨げ無しと云うべし。又信心は是非なければならぬと云はば、称名も又是非なくんばあるべからず。

今正に釈せんとするに

- 一に、名号正因の義を詳にし、二に、信心正因を弁成し、
- 三に、称名業因の義を明かし、四に、二相の化風を定め、
- 五に、信行不二を論じ、六に、称名破満を示し、
- 七に、一念得大利の相を解し、八に、十念業成の義を顕し、
- 九に、一声決定を通釈し、十に、十念滅罪を論結す。

正釈

一、名号勝因

一に名号勝因を詳にするとは、今の取る処は十七願は十八願と一念同時に、仮令正覚の一念で云うとも行信は同時。上に弁ずる如し。名号成する乎、諸仏之を讚じ、諸仏讚するや衆生聞信す。何ぞ前後あらん。

既に爾るときは、名号は因となるべき法に非ず。行と名くるときは既に十七願にありて、十八の機の手に入りてある故に、名号止因と云も作用にして、名号即果に向かふ。

尋て云く。名号を直に業因と云はるるならば、名号でも信心でも作用をなすと云ふや。

行信互具一相

今云く。信相即ち名号の相、二相あるに非ず。ただ一相。信を能具とするの相、即ち行能具とするの相なり。巾着に物を入れたる様な能具所具に非ず。

作即無作

無疑の信相其の専行相、無碍円融の能具所具なり。譬へば陶家輪の如し。一々の動搖、輪の相とも云べし。又陶の輪に任せた相たとも云べし。任すると、働くとは唯一相なるが如し。

二、信心正因

第二に信心正因の義を釈する中に二。

一には、信相を論じ、二には、称名の具不を論ず。

一、信相

初に信相とは、問云。信心正因とは能信正因と信ずることなりや。又願力正因と信ずることなりや。若し願力正因と信ずると云はば、唯信正因とは行者の思ひ葉であらで、安心の機相にあらずと云て爾るべし乎。是一。

又御文章に、一念の信力との玉ふも、行者の思ひ葉に非ずと云ふや。是二。

又信心は願力正因を持つだけの道具にして、正因に非ず。喻へば、名号宝珠をもつ手の如きもの歟、云何。是三。

答云。信じて往生と信ずると云ふも、南無阿弥陀仏にて往生すると云も、言は左右あれども思ひ葉は唯一。

阿弥陀仏の機にあるを南無と云う。南無が阿弥陀仏の働きなるを。阿弥陀仏の法と云う。故に二河譬の白道を一たびは、願力の白道とし、一たびは信心の白道とし給う。共に一の白道。機より云と、法から云うとの異のみ。

二、称名具不

二に、称名具不の義とは、問云。信心正因とは、称名報恩に簡ぶや否や。

簡内報恩

簡失意機

答。一義に云。唯信とは外所行及び自力念佛に簡び、内称名報恩に簡ぶ。

又一義に云。本願の三信十念をさして唯信と云う。爾らば称名報恩に簡ばざるやと云うに、云く、称名も信心に具せられて正因なりと云はば、行者、誤つて能称正因と云はん。爰を以て其の失意を簡去して唯信正因と云う。

今之義は第二を取る。信行元と融即不二、離さんとすれども不離。爾るに失意の機ありて、称名正因に墮せんことを恐るるが故に、称名報恩の名を立つ。

爾れども願意に達するときは、十念即三信の相にして、信に称相を具す。

本典且く失意を簡ぶを以て、信因称報との玉へども、其の信因は自爾として、称を全うする故に、「真実信心必具名号」との玉ふ。

問云。其の信具の称相云何。

初後不二

同時口称の失
因非混雜の難

答。初発の信、電光石火の如きものに非ず。能く一生涯の疑闇を除く。故に三世の業障一時に消滅す。初後不二。爾れば初起の信、一生涯を該摂す。

問云。若し所弁の如くならば、疑難少なからず。初起の信、称名まで該摂せば、自ら同時口称の失あり。是一。又因非混雜の難あり。是二。云何。

答。若し相發に約して云はば、信前行後にして、必ず同時ならず。故に、称となるべき徳を具すと云ふべし。若し体具より云はば、一生涯を南無の一念に該摂せば、称して居る徳あり。爾れども信前信後の法相は壞すべからず。故に同時口称の難は当たらず。因非混雜の難も亦当たらず。

問云。其の体具の称名は、行のつらなりや、信のつらなりや。云何。

答云。信から眺むれば、称の造作も一々みな無疑の相にして、更に無疑の外に出たるものなし。波相全うじて水相。故に浮沈初後、一の無疑なり。無疑に信とは心ばかりにひそんで居るものに非ず。三業に顕れるもの。顕れても顕れても無疑。

喻へば、月光雲霧にさへられてもさへられずとも、其の光に増減なし。信も亦爾り。浮沈は煩惱の雲霧の隠不による。隠顯ともに一の無疑なり。

信相即称名

「これによりて眞実信心を獲得した人は、かならず口にも出し、また色にもそのすがたはみゆるなり」(25)

故に勅章にも「色にも其の相はみゆるなり」との玉ふ。其の相とは信心をさす。文を披くべし。信心の相即称名。故に信卷にも本願の十念を引いて信相とし給ふ。此ときは信行不二門。不二とは称に信を不二するに非ず。称を信に不二するなり。

三、称名業因

三に、称名業因の義とは、

問云。称名には業因の作用はなかるべし。真因信一念に究竟するが故に。

相続破満

答。信一に究竟するが故に、此の信心の其の併行なるが故に、称すれども称すれども無疑初起の信なり。初起ののびゆく称名故、一称々々みな作用す。名号より談ずるも亦爾り。

問云。称の全体即名と云はるるならば、名即称も云はるるや。

答。称即名と云るれども、名即称とは云はれぬ。何となれば、称の拳体名にして、称相亡じて、名の方へ不二するに非ず。称相即名故に。名即称と云へば、名即名と云ふことになる。

問云。能所不二の称名、所行正因を顯す。称名正因の名は許すや。

答。文の上では次第に義を成ずる故、随分称名正因らしく云て、所行正因を顯すことあり。名目は、義の究竟を一口にして知らするものなれば、称名正因の目は用ひられぬ。称名正因が所行正因のことなる故に、義の如く立目して所行正因と云ふべし。

称名正因

称即名

四、化風同別

信行總論門

信行別論門

四に正しく化風の同別を論ずるは、二祖究竟するときは一致なれども、且く終吉は信行總論門に約す。高祖は別論に約す。

問。第十八の願、至

心等の三信を以て要と為す、何ぞ至心信樂の句を除て今「称我名号」の句を加るや。此の句願文に答。此に深意有、今言所の称我名号は、則本經の至心信樂欲生の意を示す。然所以は、至心等とは、仏の名号を称して往生の益を得る、是れ仏の本願なり、此の如く信知する、是を至心信樂欲生と名く。

故に此の心を發す、即はれ称我名号の義なり。

問云。爾れば称れば往生と云へば、是非口にかからねば能わず。爾れば称へぬものは往生はなるまひ。

答。反問して云く。称へぬものとは誰ぞや。謂く、聞已往生の機なるべし。

云く、爾らず。諸行及び自力念佛に対し、称ふれば往生と云ふなれば、称へぬものは自力の機、称ふるとは他力なれよと云ふことで、聞已往生迄も称へる中に收まる。

問云。称ふれば往生とすむるに、云何が聞已往生と信ぜらるるや。

答。ただ称へとは云はぬ。称へこころに目をかけな、称へ振りに依らず、唯弥陀名号の用きに任せよと云こと。

仍て称へ様を示して、一心專念佛名号、行住坐臥時節久近多少によらず、威儀によらず、たゞ一心に業因成就の弥陀名号を称すべし、一念二念聞名のものも往生すべしと勧め給へるが終吉の法義。

故に称名の處で業因を談ずるは、能称の信念、所念の法體をさす。其の所行能信が、称の拳体

称の拳体所行能信

に顯る故に、拳体即信なり、名なり。

問云。成程、称即名とは合点すとも、名信が称となりたで往生とは思うべし。称れば往生と勧むるが故に。

答。称となりた處で往生とは勧めぬ。称々みな名号業因なり、即他力なりと知らする故、一声一念往生と云う。

仍て総論門のときは、業成の場處は定めず。此を定むるは信行別論の法相。総論の上ではただ一名号と知らすること。

終吉の上では称へざる機に約したるに非ず。称ふる機に付いて、教へたもの。

問云。爾らば、終吉、何故ぞ、信心往生を本とせざるや。

答。行々相対するが故に。何故ぞ行に約する。

荷園義

一義に、時機未熟の故に。他轍に云く。他力法の全相は、大經の信疑廢立にしくなし。爾るに觀經の行々相対によるは、時機未だいたらざるが故なり。爾れども、仮設方便の如きには非ず。弘願の真面目中に於て、且く相対絶対の位を分かつのみ。

又一義に、終吉にも信心為本あり。高祖にも念佛為本あり。師資相違せず。但し且く其の表て立つ處を殊にするものは、共に時機を守る故に。終吉にも熟未あり。高祖にも熟未あり。又、終吉にも熟未なし。高祖にも熟未なし。宜しく時機を守ると云ふべし。味わうべし。

石泉義

五、信行不二

第五に信行不二。

一義に、体一不二。二相不離と云ふべしと。此の義、信の全相を尽くさず。称を其の仮信と見ることを知らざるが故なり。

二相不二

今云。体一不二は勿論、二相不二まで立てる。信相即称名。

今、体一不二のみを解する義を試みに難じて云く。其の体とは四法の体たる名号なれば、行信不二のみならず四法不二なり。四法不二なるときは、果に対する因の行信不二の論にあらざるべし。是一。

又、宗体の体は因果の体にして、爾も非因非果なるもの。何ぞ因の行信の不二を顯すことを得ん。云々。

六、破闇満願

六に破闇満願とは。

称名實に自の破闇あり。一念の信即多念なるが故に。一念にて三世の闇を破す。一念の破闇が即多念の破闇。顯れても顯れても一念中の多念なれば多念一々作用すること、知るべし。

問云。一念の処に破闇し終らば、二念曰後は破すべき闇なかるべし。

答。夫れは信行分離門に約して難ずる。故に今は其の難を受けず。称名破闇を談ずるは、いつも信行不二なればなり。思うべし。

七に得大利とは。 (省略)

八に十念業成とは。 (省略)

九に一称決定と易行の至極を示す。

十に十念滅罪とは。 (省略)

(省略)